

イギリスの自己資本比率規制の展開
—80年基準からバーゼル合意の適用まで—

ノースアジア大学経済学部 北野友士

イングランド銀行は、1980年に“**The measurement of capital**” (以下、「80年基準」とする)という自己資本比率基準を公表した。この80年基準は最低所要自己資本がないため、形式的には規制というよりも自己資本比率の計算基準であったが、その後の銀行に対する自己資本比率規制の展開を考える上で、重要な基準である。つまり、1988年に成立したバーゼル合意(いわゆるBIS規制)に大きな影響を与えたと考えられる。ただし一方で、80年基準はバーゼル合意とは異なる特徴も併せ持っていた(北野(2008)、参照)。

本報告は、バーゼル合意とは異なる特徴を持つ80年基準を課していたイギリスにおいて、自己資本比率基準(規制)がその後どのように展開していったかを考察する。つまりバーゼル合意、ひいては自己資本比率規制の生成期とでもいうべき1980年代のイギリスに焦点をあてることで、自己資本比率を用いた銀行の規制・監督手法の歴史的な意義を検証することが本報告の目的である。

参考文献

北野友士(2008)「イギリスにおける自己資本比率基準と国債管理」
『証券経済学会年報』第43号、108-112ページ。